



2013年1月28日

医師および患者対象の「鼻閉」に関する意識調査を実施

～アレルギー性鼻炎患者の約 8 割が鼻閉症状を有し、
その約 4 割が症状について医師に伝えていない実態が明らかに～

サノフィ株式会社(本社:東京都新宿区、代表取締役社長:ジェズ・モールドینگ、以下「サノフィ」)は、アレルギー性鼻炎患者を診察する全国の医師 300 名および全国のアレルギー性鼻炎患者 1,000 名を対象に、「鼻閉」に関するアンケート調査を実施しました。

その結果、医師調査においては、アレルギー性鼻炎患者の約 8 割が何らかの鼻閉症状を有することが明らかになりました。また、患者調査では、9 割強の患者が鼻閉症状のため日常生活への支障を来し「困っている」としながら、その症状について自ら医師に伝えていない患者が約 4 割で、また現状の治療法では鼻閉症状が緩和されていないとする患者も約 8 割にのぼることが分かりました。

アレルギー性鼻炎は、有病率が全国民の 30%を超え、今や国民病といわれる疾患です¹。生死に関わる症状ではないものの、患者の生活の質(QOL)を大きく損ない、労働生産性にも多大な影響を及ぼす²ことが問題視されています。アレルギー性鼻炎の 3 大症状は、くしゃみ、鼻汁、鼻閉ですが、なかでも鼻閉は非常に辛い症状でありながら、患者自身が治療の必要性に気付いていなかったり、現在の治療に満足していなかったりする実態が、本調査により明らかになりました。

本調査を監修した医療法人財団順和会 山王病院 耳鼻咽喉科 倉島一浩医師は、「今回の患者調査により、鼻閉症状のメカニズムに対する患者の認知度や理解度は、くしゃみ・鼻汁よりも低いことが明らかになりました。これが服薬コンプライアンスの維持を難しいものにしていくといえます。治療においても、約 4 割の患者が自ら鼻閉症状について医師に伝えていない現状が判明しましたが、この背景には、過去の経験から治療に期待を持たなくなったことや、治療に対する不信感や諦め感があると考えられます。さらに、『医師の治療』と『患者の治療に対する期待』との間にギャップが生じていることも考えられ、医師による患者ニーズの聞き取りが十分に行われているとは言い難い現状が浮き彫りになりました。鼻閉治療効果の向上のためには、医師が患者に対して積極的に聞き取りを行い、患者の満足度を向上させる治療に取り込むことが重要になると考えられます」と述べられました。

1 馬場廣太郎 他: Prog Med 28 : 2001, 2008

2 Lamb CE, et al : Curr Med Res Opin 22 (6) : 1203, 2006

サノフィ株式会社

〒163-1488 東京都新宿区西新宿 3-20-2 東京オペラシティタワー
www.sanofi.co.jp



今回実施した医師調査および患者調査の主な結果は、添付資料をご覧ください。同結果は「新薬と臨床」誌³においても発表されています。

サノフィは、アレルギー性鼻炎に伴う鼻閉治療の重要性を、1人でも多くの方に理解していただくため、今後も疾患啓発活動に取り組んでまいります。

サノフィについて

サノフィ・グループは、フランス・パリに本社を置きグローバルに多角的事業を展開するヘルスケアリーダーです。世界 100 カ国に 11 万人以上の社員を擁するサノフィは、糖尿病治療、ヒト用ワクチン、革新的新薬、コンシューマー・ヘルスケア、新興市場、動物用医薬品、新生ジェンザイムの 7 つを成長基盤として、患者さんのニーズにフォーカスした治療ソリューションの創出・研究開発・販売を行っています。サノフィは、パリ(EURONEXT:SAN)およびニューヨーク(NYSE:SNY)に上場しています。

日本においては、約 3,000 人の社員が、「日本の健康と笑顔に貢献し、最も信頼されるヘルスケアリーダーになる」をビジョンに、医薬品の開発・製造・販売を行っています。詳細は、<http://www.sanofi.co.jp> をご参照ください。

以上

<別紙資料> 鼻閉治療に関する医師および患者調査結果

3 倉島一浩 他:新薬と臨床 61 (10) : 2053, 2012



<別紙>

【鼻閉の治療に関する医師調査および患者調査】

1. 医師調査概要

対象：抗ヒスタミン薬を処方する12歳以上の患者を10名以上診察する医師300名

	開業医(99床以下)	専門医(100床以上)
内科系	100名	—
耳鼻咽喉科	100名	100名

地域：全国

期間：2012年5月11日～15日

手法：インターネット調査

集計方法：母集団拡大集計を行い、「全国」の値を算出。

※全国の医師数は、厚生労働省「平成20年医師・歯科医師・薬剤師調査」「平成20年医療施設(静態・動態)調査・病院報告」より算出。内科診療所の値は、一般内科診療所の値を使用し、12歳以上のアレルギー性鼻炎患者の診察数が10名以上の医師の出現率は、調査実施者の過去調査に基づき算出した。

2. 患者調査概要

対象：鼻閉症状のあるアレルギー性鼻炎で通院している患者1,000名

	16～19歳	20代	30代	40代	50代
男性	100名	100名	100名	100名	100名
女性	100名	100名	100名	100名	100名

地域：全国

調査期間：2012年4月13日～19日(スギ花粉飛散期直後)

手法：インターネット調査

3. 主な調査結果

① アレルギー性鼻炎患者のうち、何らかの鼻閉症状を有する患者は8割弱(医師調査)

アレルギー性鼻炎患者の鼻閉症状について、母集団拡大集計で「全国」の値を算出したところ、何らかの鼻閉症状を有する患者は78.0%にのぼり、中等症以上の鼻閉症状を有する患者についても50%以上いることが明らかになりました。

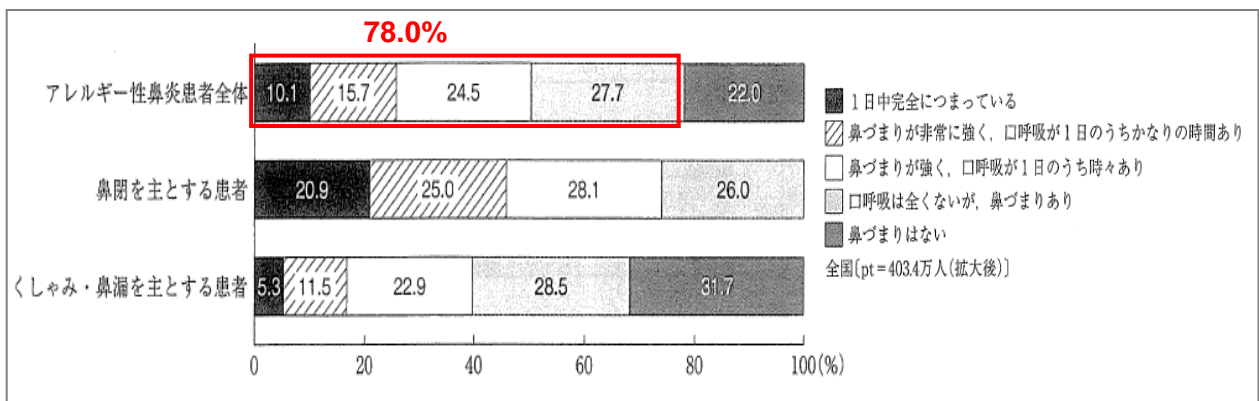


図1:アレルギー性鼻炎患者の鼻閉症状の程度<医師調査>



② アレルギー性鼻炎の鼻閉がどのようにして起こるかを知らない患者は約 6 割 (患者調査)

アレルギー性鼻炎の鼻閉が起こるメカニズムに対する認識について聞いたところ、「わからない」と回答した患者は 56.9%と約 6 割にのぼり、くしゃみ・鼻汁が起こるメカニズムがわからないと回答した患者(50.8%)に比べてやや多いことが示されました。

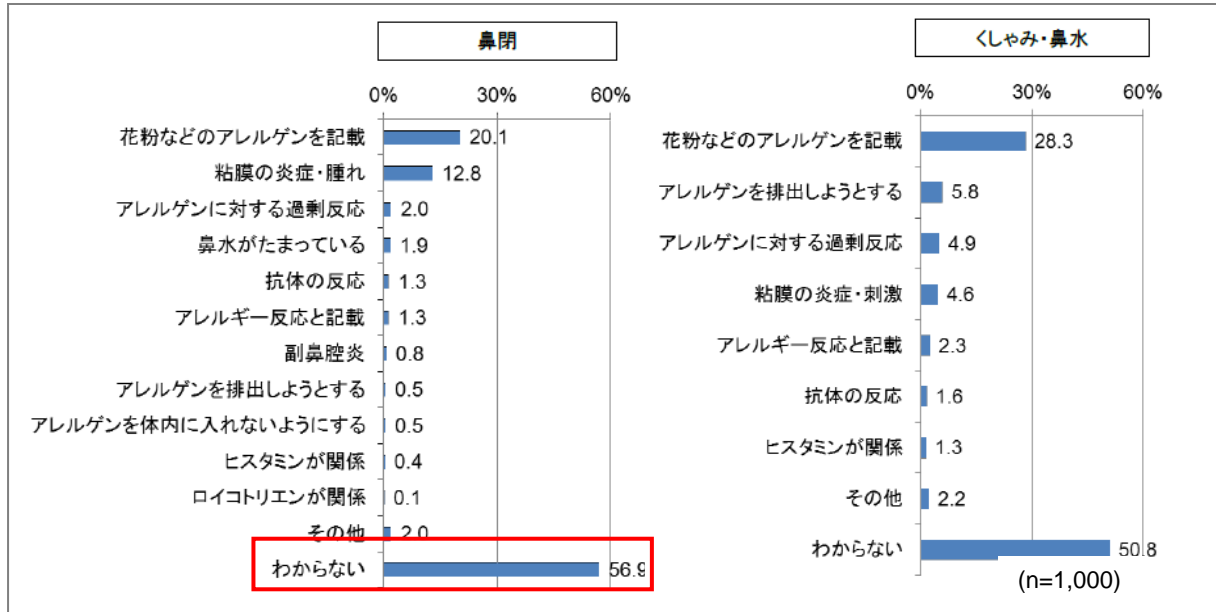


図 2:アレルギー性鼻炎の鼻閉/くしゃみ・鼻汁が起こるメカニズムに対する認識 <患者調査>

③ 鼻閉症状で困ったことがある患者は 9 割強 (患者調査)

鼻閉症状で困ったことがあるかを聞いたところ、全体の 92.9%の患者が「困ったことがある」と回答しました。また、鼻閉を感じる時間帯として、最も多く挙げたのは「22~23 時」で 42.9%、また「6~8 時」の時間帯でも多くみられました。さらに、鼻閉によって生じる状況のうち、日常生活に支障を来すものについて調査したところ、「十分な睡眠がとれない」、「仕事・勉強・家事に集中できない」などが多く挙がりました。

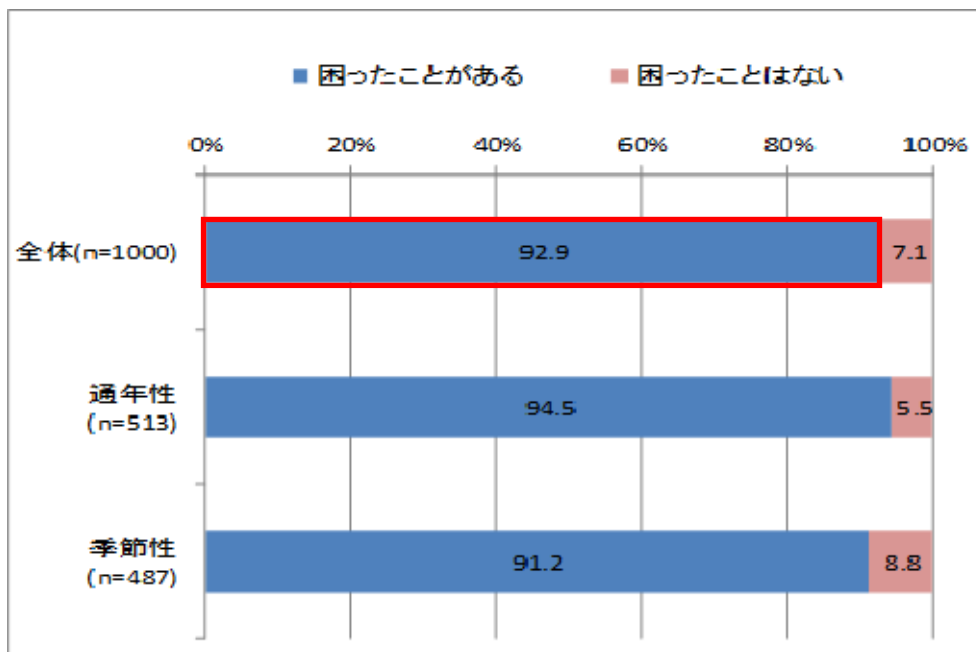


図 3:鼻閉で困ったことの有無 <患者調査>

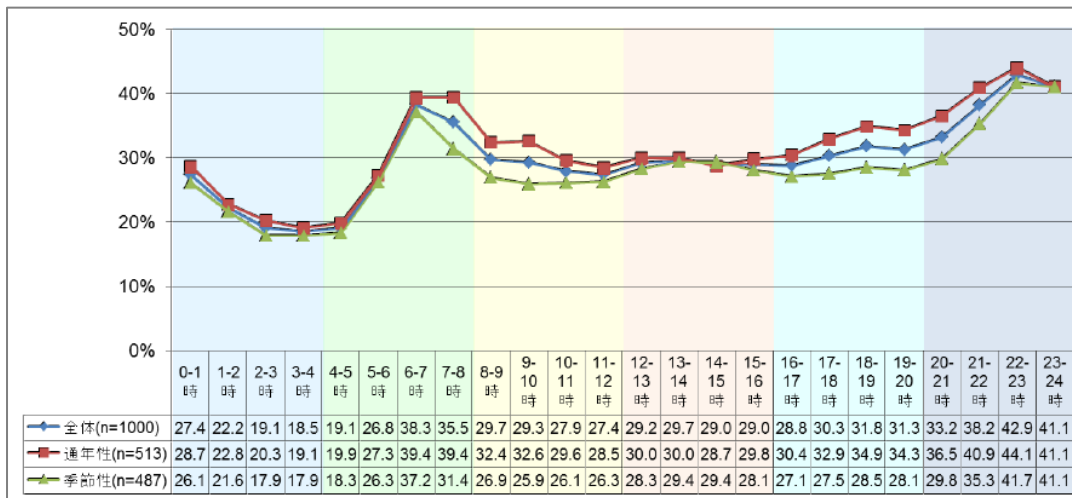


図 4: 鼻閉を感じる時間帯 (複数回答) <患者調査>

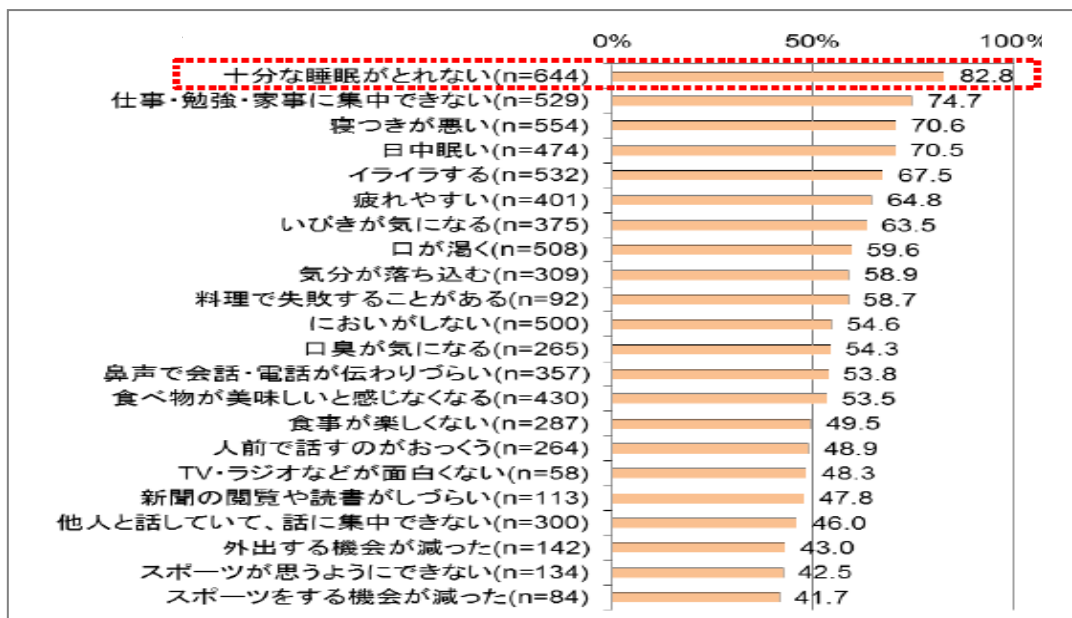


図 5: 鼻閉によって生じる状況のうち生活に支障があるもの (複数回答) <患者調査>

④ 現在使用している治療薬では、「鼻閉がスッキリとれない」患者が約 8 割 <患者調査>

現在使用している鼻閉治療薬の効果について調査したところ、現在の薬で「鼻づまりの症状がスッキリとれる」と回答した患者は全体の 22.0%にとどまり、約 8 割の患者は鼻閉症状が緩和されていない現状が明らかになりました。

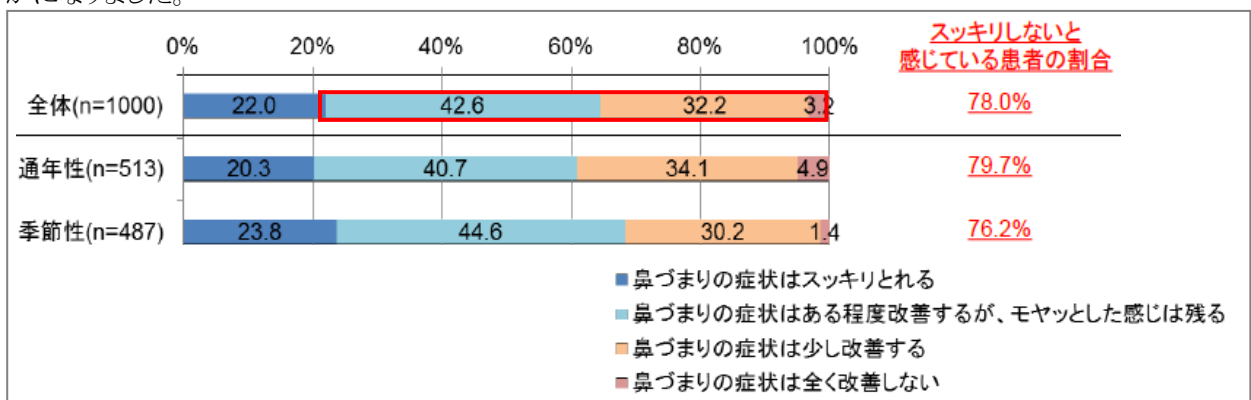


図 6: 現在使用している鼻閉治療薬の効果 <患者調査>



⑤ 自分の鼻閉症状について、自ら医師に伝えていない患者が約 4 割 〈患者調査〉

診察の際、自分の鼻閉症状について医師に伝えたかどうかを聞いたところ、「自分から伝えた」患者は 63.8%であり、約 4 割の患者は自ら鼻閉について伝えようとしていない現状が明らかになりました。医師に鼻閉の症状を伝えなかった理由として最も多く挙げたのは、「鼻づまりがあっても治療は変わらないと思うから」でした。

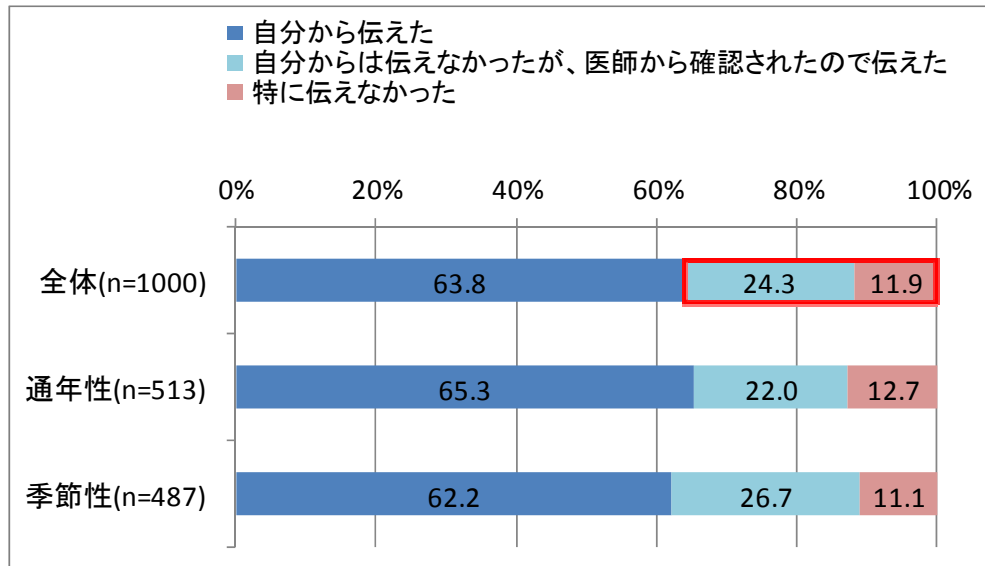


図 7: 鼻閉の症状を医師に伝えることの有無 <患者調査>

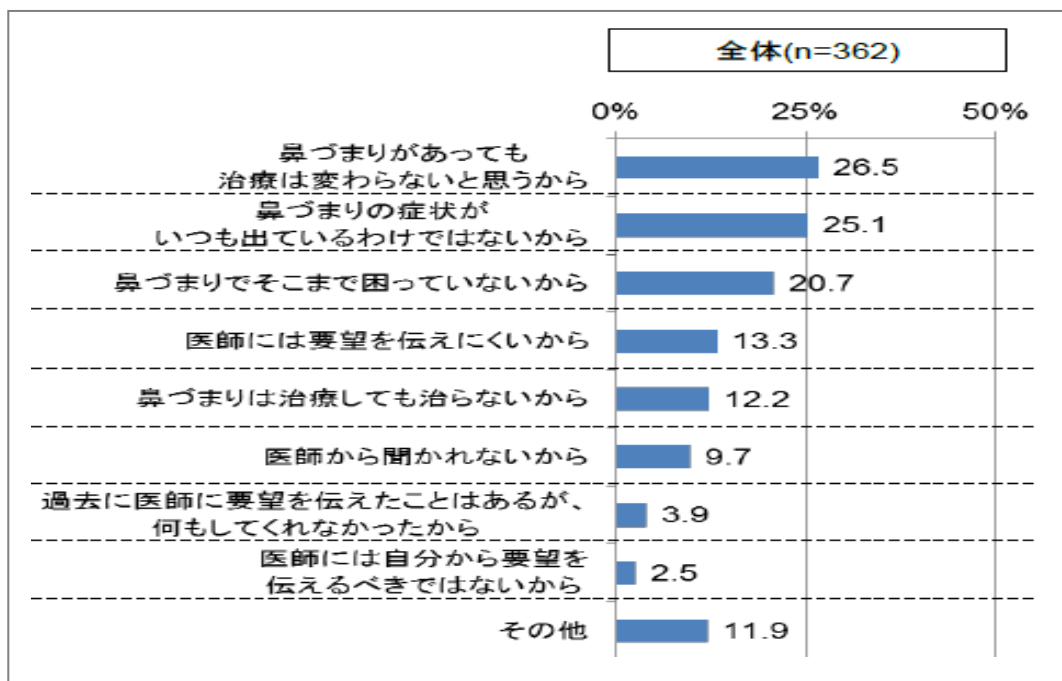


図 8: 鼻閉の症状を医師に伝えなかった理由 (複数回答) <患者調査>

以上